

R-1 南三陸町歌津中野地区 2011年12月21日(水)

報告者名	林 勲男	被調査者生年	1928年(男)
調査者名	林 勲男	被調査者属性	船大工

船大工としての修業

船大工の父親の仕事の様子を子供のころから遊びながら、時には手伝いながら見てきたので、作業の順序は頭の中に入っていた。早波(さっぱ)船の作り方は、20歳頃に泊のA氏のもとで住み込みの修業で学んだ。父親は船外機を取り付ける仕方を知らなかったが、A氏が船外機を取り付ける作業を行ったので、自分はそこでの修業で覚えた。修業といっても手取り足取り教えてくれるわけではなく、大工の仕事を手伝う中で次第に覚えていくというものであった。

合木(かっこ)船

父親が作っていたのは、丸太をくりぬいた底板で造る「合木(かっこ)舟」で、岩場での漁業に向いており、岩にぶつかっても多少のことでは壊れない頑丈なものだった。多賀城市にある県立博物館(東北歴史博物館)に収められている合木船は渡辺栄さん(没)が作ったとされているが、自分も手伝っている。合木船は幹の曲がったところを利用するため、木挽きの仕事が入る。一人では作れないし、今、それを作る技術を持っているのはおそらく自分だけだろう。しかし、自分が20歳頃から、より速い早波船が次第に主流となってきたので、その修業に出たわけである。

災害後の船造り

今回の災害前は、造船に執念を燃やす人も周囲に少なくなり、自分も年をとってきたのでしばらく休んでいた。これまでにおよそ300隻の0.5-5トンの木造和船を作ってきた。この津波で、自分の船(0.7トン)が流されてしまった。沿岸のそれぞれの漁協でも多くの船が流されてしまい、すぐには揃わないだろうと考えて、10年ぶりに船づくりに取り組んでみた。

3年ほど前に前立腺癌が見つかり、3ヵ月に1回その検査を受けに病院へ通っている。薬による治療をしており、癌の進行は見られない。自分の船1隻が流されて保険金が30万円おりた。エンジンは外して安全なところに保管していたので被害を受けなかった。新しい船が欲しいが、支援を待っていたのでは、いつ手に入るか分からないので、6月にその保険金で船を作ろうと考えた。それを聞いた奥さんは最初は驚いたが、長男ともう好きなようにさせてあげることにした。病をおしての船造りなので、完成できるか、自分が倒れてしまうかの賭けに出たと思っている。健康には十分に気を付けて、急がずに細く長く働いて完成させた。2か月半で、全長7メートル、幅1.4メートルの船を完成させた。

船造りを始めたことが知られ、川でサケ・マスを捕る川船が流されてしまい、北上川沿いの船

大工を探したが見つからないのでということで、依頼が来た。しかし、船は人の財産を預かって作るわけだから、病気を抱える自分が、軽々しく引き受けるわけにはいかないと、当初は断ったが、お盆のころに材料の杉材まで持ち込まれたので引き受けることにした。

櫂は乾燥させたナラの木で作るのだが、津波で使用していた多くの櫂が流されてしまったため、28本ほどあった櫂のすべてに買い手がついた。家や倉庫が流されてしまった人は、売約済みの紙を貼って、うちで預かっている。材料の木は、7、8カ月間から1年間ほど水に漬けておかなければならない。さもないと割れ目が入ったりしやすい。

今後、櫂を欲しいという人が増えてくるだろうから、少しずつ作り置いておこうと思う。



写真 櫂を作る話者